

# ポーランド血の弾圧

「自主連帯」をカギに自由化への道を歩み始めていたポーランドでは、かつての「スワハの春」(1968年)と同じように戦車と銃口の前にその自由は押しつぶされつつある。戒厳令後、全権を握ったソ連カイライ救国軍事評議会(議長・ヤルゼルスキ首相)は、国民に次々と流血の弾圧を加え、死者や負傷者が相次いでいる。その数は殺害された人数百人、逮捕者は10万人にもものぼっているとされる。しかし、自由を求める国民は軍隊の弾圧に屈することなく、壮絶な抵抗戦を繰り広げており、その抵抗は拡大の一途をたどっている。一方、ソ連軍の将校が諸作戦に参加していることも、しだいに明らかになってきており、「ソ連の介入」はすでに始まっている。

実は  
ソ連が  
仕掛人!

ソ連の指令を戒厳令が布告されたポーランドでは現在、弾圧の嵐が吹きあれている。スロワフの鉄道車両工場では12月14日、30人の労働者が殺害され、22日には同工場に戦車が突入、15人が死んでいる。炭鉱地帯のカトウツェでも16日労働者に治安部隊が発砲、7人の死者と39人の負傷者が出ている。同地区では19日にも、軍が60人の労働者を殺害。

シレジア地方では17日、軍隊が労働者約百人を殺害している。またタヌスクでも16日、市民104人が負傷。また17日にも同地方で27人の負傷者を出している。軍警による弾圧は全土に広がっており、死傷者は4,5百人に達し、逮捕者は10万に達したと伝えられている。

『ポーランド国民にとっては、ソ連軍の介入はすでに始まっている!』

『ポーランド軍の制服を着たソ連軍将校が軍事作戦に参加している!』

(フランソワーズ・スラトン女史談)

今回のこのポーランド血の弾圧は、共産主義体制が人間の基本的自由との両立を絶対に許し得ない体制であることを、世界に教えたといえる。また、共産主義体制下では、「労働者の、労働者による、労働者のための政治」など、全く実現不可能であることも見せつけた。さらに、共産主義体制が危機に陥る時、ソ連は結局は武力を行使するしか対応策を知らぬことも世界の人の目の前に見せつけたといえよう。

京都大学・共産主義研究会